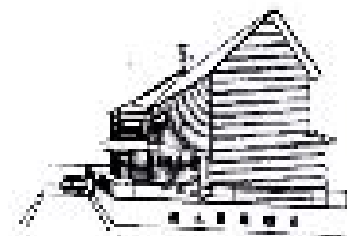


<先週と今朝の聖書から> マタイによる福音書 10 章を読み進めることとなります。弟子たちは村々町々に派遣されます。遣わすに際してイエス様が語られた、励ましの言葉の中心の一つは“旅行のための袋も、二枚の下着も、くつも、つえも持って行くな。働き人がその食物を得るのは当然である(10 節)”ということであり、“その家にはいったなら、平安を祈ってあげなさい(12 節)”の言葉でしょう。すなわち、“そのところの人となり、その人に頼りなさい”ということでしょう。清水の殆んど教会の牧師達もこのように他から遣わされてきた働き人だと思っていることでしょう。問題はこの御言葉が“励まし”であると同時に“慰め”の言葉になりえるかどうかということでしょう。私達の全てが、信仰者であろうとする時、主イエスは、励ましと同時に、大きな慰めと私達への信頼をもって見てくださっているのです。歴史の一時期、宣教師は“西洋の豊かさや学識”をもって、日本に受け入れられたことがあるかもしれませんが、聖書は“行って、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ(7 節)”と教えています。イエス様は、この世に何の遺産も残されませんでした。着ている物も残されませんでした。ただ信頼できる弟子たちを残されました。御言葉はさらに続きます。“わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものである(16 節)”と。このように読み進めると、この言葉も“残酷”という意味を全く持っていないことが分かります。“彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中であって語る父の霊である(19 - 20 節)”という教えも、最高の慰めであり、恵みです。この恵みを知らない時、私たちを待っているのは“不安”と恐れでしょう。ヨハネは“完全な愛は恐れをとり除く(ヨハネ 4:18)”と聞きました。イエス様の励ましに頼らないで、我が勝利を手にしようとする時、“兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、また子は親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう(21 節)”ということになるのです。これは私たちが知っている通り、遠くの人よりも、家族や身内の中から始まるのです。愛する力を得たいと思う人は、イエス様から、その力を得るべきでしょう。イエス様から力を頂かなければ、実に無力なのが私達です。ここに慰めの言葉“わたしについてきたいなら、自分の十字架を負うて、従ってきなさい(マタイ 16:24)”があるのです。

週報

2009年 8月 16日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト
清水草薙キリスト教会

牧師 村上 定幸

ユース礼拝	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式	第一日曜日)
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル一会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈祷会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡市清水区草薙杉道 3 丁目 2 - 2 6

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp